公開講座「地域と福祉」雑感

沖縄大学　法経学部
谷口　正厚

1997年４月、沖縄大学は法学科と経済学科の２学科を法経学科という一つの学科に統合し、法律、政治、経済、経営などの知識を総合的に学びながら、環境や福祉や平和等のテーマも含む現代沖縄の直面する具体的な課題を解決する力を身につけさせようという趣旨で学部の改組転換を行いました。

私はこの取り組みの一環として、今年度（1998年度）は従来担当してきた経済理論関係の講義の担当をはずれ、「障害者福祉」と「地域と福祉」という二つの障害者福祉関連の講義を初めて担当しました。ここでは、そのうちの「地域と福祉」の講義を１年間やって思ったところを述べてみます。

１．講義の趣旨・目的

私が行った二つの障害者問題に関する講義の中で、「障害者福祉」では主に理論的な問題を取り扱うことにし、「地域と福祉」では沖縄の障害者問題の現場から学ぶ講義と位置づけ、第1回の講義で次のような位置づけを学生に話しました。

「地域と福祉」は1998年度、法経学部法経学科で開設される新しい科目で、沖縄の福祉の最前線で仕事をしている第一線の専門家および障害を持っている当事者を招いて話を聞く講義であり、隔年で開講される。今年はその第１回である。今年のテーマは「重度障害者の発達とノーマライゼーション」とし、様々な角度から沖縄の現状と課題を明らかにする。

講義は、第一に、受講対象として障害者問題に関する知識や経験のない人にもついていけるものとすること、第二に、発達、自立、ノーマライゼーション、人権をキーワードとして、沖縄の障害者問題の現場で活動しているスタッフ、および障害者・親を講師として招き具体的な問題に即して学べるものにすること、最後に、単に沖縄の現実を素材とするにとどまらず、理論的にも実践的にも内容の高い講義にすること、特に大都市地域とは違った沖縄のような「地方」で生活し活動する人たちとの共同の基盤を広げるための問題提起をなしうる内容のものにすることをめざして運営する。

「地域と福祉」の講師・講義タイトルは次のような内容でした。

序　論

第１回（４／14）

１年間の講義概要、授業の進め方について。イントロダクション。

第２回（４／21）

「デイセンター」を考える～ビデオ『大人になってもイキイキト』を見ながら

第３回（４／28）

最重度障害者といのち～高谷清『はだかのいのち』を紹介しながら

第４回（５／12）

受講生同士の懇親会

（第２回～第３回は共通テーマの意義を考えるために、ビデオや本を紹介しながら私が講義を行った）。

本　論（学外講師による講義）

第５回（５／19）

前原　穂積（元那覇市社会福祉協議会事務局長）

戦後沖縄の福祉の歩み～障害者運動を中心に

第６回（５／26）

朝妻　　彰（島尻養護学校高等部教員）

沖縄の小規模作業所運動とノーマライゼーション

第７回（６／２）

山城　　章（那覇市社会福祉協議会職員）

重度障害者の移動・交通問題～うまんちゅ号の取り組みから

第８回（６／９）

名嘉　　淳（オリブ山病院地域支援部長）

障害者地域生活支援の実践

第９回（６／16）

上里　直子（地域介護者保障制度を実現させる会会長）

重度障害者の自立生活の体験から

第10回（６／30）

谷口　正厚

補足と復習

第11回（７／７）

新城安隆（このまちをこよなく愛する会ミッキーズ会長）

ミッキーズの歩みと課題

第12回（７／14）

谷口　正厚

生命科学と障害者問題～ビデオ『生命誕生の現場から　その二』を題材にして

後　期

第13回（10／6）

新門　　登（地域介護者保障制度を実現させる会会員）

沖縄における自立生活運動の現状と課題

第14回（10／13）

酒井　　洋（那覇市療育センター理学療法士）

重度障害者の地域療育活動

第15回（10／20）

嘉手川重常（大平養護学校寄宿舎職員（寮母））

障害者の性とノーマライゼーション

第16回（10／27）

仲根　健作（那覇市社会福祉協議会職員）

福祉の主人公は誰～沖縄における当事者運動の現状と課題

第17回（11／17）

砂川　喜洋（泡瀬養護学校名護分校教員）

重度障害者の発達と労働

第18回（11／24）

新里　吉弘（沖縄県肢体不自由児者父母の会連合会会長）

障害児の親、その変化と新しい課題

第19回（12／1）

渡嘉敷綏秀（沖縄県視力障害者の生活と権利を守る会事務局長）

視覚障害者の社会参加

第20回（12／8）

島村　　聡（那覇市役所福祉課主査）

なは障害者プラン

第21回（12／15）

谷口　正厚

沖縄の障害者のノーマライゼーションの課題～離島問題にふれながら

第22回（1／9　土曜講座を兼ねて開催）

北野　誠一（桃山学院大学社会学部教授）

日本と世界におけるノーマライゼーションの課題

2．大学の通年講義であると同時に公開講座

この講義の第二の特徴は沖縄大学の通常の講義であるだけでなく、「公開講座」と

して一般市民の聴講を認めて実施されたことです。実際には決定が遅れて宣伝の期間がほとんどなく、講義が始まった後の４月から５月にかけて一部の人たちに知られるにとどまりましたが、10人の学外（学内の受講生48人に対して20.8%）の聴講生が参加しました。

これに加えて、さらに現役の高校生にも聴講の道を開くことにしましたが、これは決定した時期がもっと遅れてしまい、実際に高校に宣伝が届いたのは夏休みも近くなった頃ではないかと思われます。その結果かどうかわかりませんが反応は全くありませんでした。１．で述べたように、この講義が内容的には高校生でも理解できるやさしいものであり、また、１回毎に一人の講師の話を聞くということで完結しており、講義時間も高校の授業が終わっている午後６時半から８時という参加しやすい時間帯でした。そういう意味では、福祉に関心を持っている高校生にとっては格好の学習機会であったので、高校現場からの反応が全くなかったことは極めて残念なことだと思っています。高校の進路指導の観点からも、大学の通常のなまの講義を知ることは意味のあることではないかと思います（“オフキャンパスセミナー”などという名称で高校生のために特別に計画された企画は、沖大でも他大学でもやられているようですが）。高校現場ではそういう発想はないのでしょうか、機会があれば現場の意見を聞いてみたいところです。

学外の聴講生の参加は、大学の学生にはよい刺激を与えたようです。福祉施設や行政の職員、障害者団体の会員（障害者の父母を含む）、そして障害当事者等様々な分野の人がいて、そして講義の感想も具体的で自分の経験も含めて積極的な発言が多く見られました。

学外聴講生の所属は障害者団体の会員・職員４人（障害児の親を含む）、障害者施設の職員４人、自治体職員１人、当事者１人、保母１人でした。そのうちから一つ「受講を終えての感想」を掲載します。

「受講を終えての感想」

障害者福祉を勉強したいと思って受講した「地域と福祉」の講義でした。障害をもった当事者の方からの話や、ボランティアで又は仕事として障害をもった人と関わっている方たちのいろんな面からの話が聞けて、とても勉強になりました。

まず驚いたのは、障害者福祉に関する考え方がとても進んでいることでした。ノーマライゼーションの問題、性の問題、仕事のことなど、一つのことを多方面から捉えて考えないといけないという講師たちのは、私のなかの“価値観”をゆるがしました。目に見えることに答えをみいだしてしまいがちな毎日の生活を「ちょっと待って、こういうふうに考えてみたら」と思えるようなゆとりも少しもてるようになった気がします。

先月の土曜講座（1999年１月９日）のおり、「障害者の人権白書」を買いました。

まだまだ、障害をもった人が生活し生きていくにはたいへんな社会なのだということがよくわかります。人間、誰でも障害があり（広い意味での）、それが各々に違った形であらわれていると考えると障害も個性だと思えるのですが、目に見えるもの、形のあるものに価値を見いだし判断の基準にしてしまう今の社会や私たちの価値観からのなにげない言葉やしぐさで、障害者とよばれている方たちを傷つけているのでしょうね。

何かしたいと思っているだけではだめだと思い、名護市で活動している「やんばる福祉塾」の仲間にいれてもらい、北部の福祉を考え行動する仲間の方たちの話を聞き、少しの手伝いをさせてもらっています。去った12月に伊波敏雄さんという、ハンセン病回復者の方の講演会を福祉塾で取り組み、成功させることができました。障害をもった人たちとつきあってみることが最初だと思いますので、ボランティアもやってみようと思っています。この講義を受けたおかげで、一歩ふみだす機会と勇気ができました、ありがとうございました。

3．出席カードと感想のプリントによる配布

この講義のもう一つの特徴は、毎回必ず出席カードにその日の授業の感想を学生に書かせたことです。この感想は、次の週の講義でプリントして学生に配りました。学生は、これを読むことによって自分以外の学生が先週の講義を聞いてどのような感想を持ったか、どのような疑問を持ったかを知ることができます。時によっては個々の学生の感想に関して私がコメントを付け加えたり、あるいは学生の感想に共通する問題に関してコメントを加えたりしました。友達の感想を読むことは（この授業の場合は、社会人や障害児の親等学外聴講生の感想なども含まれますのでよけいに）学生にとって楽しみだったようです。

講義の感想を書かせて、次の週にそれをプリントして配布することはこの「地域と福祉」の講義だけでなく他の講義でも５年ほど前から私が続けていることです。はじめて私が試みた時は、プリントについて次回の講義の始めに時間をとってコメントしたり一部を読みあげたりしていましたが、やがてそれをやめました。それをすると講義が進まなくなるからです。

他の教員で同じような試みをしていた方もいました。地域研究所の教育問題研究班で議論したこともありました。出席カードに書かせることを共通点として、単に出席の確認に使うのみでなく、①次週にコメントをすることを重視する人、②感想ではなく講義内容を理解しているかを知る「小テスト」と位置づける人、③成績評価の重要な資料とする人、あるいはこれらの組み合わせ等様々だったと思います。先に述べたように、私の場合はその位置づけを「感想、質問」とし、次週にすべてプリントして返すことを原則としました。プリントに学生の名前を入れるかどうかは試行錯誤を繰り返して、今は実名を入れて返しています（ケースバイケースで内容によっては匿名

で返すこともあります）。はじめは名前を入れなかったり、学籍番号のみをを入れたりしていました。今年は実名で良かったと思いますが、来年もそれでいいかはわかりません。

「感想プリント」に関するこれまでと違った今年の特徴は、感想の量と質です。「地域と福祉」では感想を書かないで名前だけを書いて出す学生がほとんどなく、また1、2行ぐらいとか無内容なことを書く学生も極めて少数でした。多くの学生が率直に自分の感想を書き、それが他の学生にいろいろな刺激を与えました（5年ほど前に、「経済原論Ⅱ」の講義で「感想プリント」の配布を始めた頃は、全体の1／4か1／3ぐらいは白紙か無意味なことが書かれたものでした）。障害当事者や現場の専門スタッフによる講義が学生に好ましい刺激を与えたといえます。こうしたやり方を含めて、学生に知的な刺激を与える教育方法について大学でも積極的に議論することが求められています。私も招聘講師もビデオやスライドを頻繁に利用してきましたが、現在ではこれらを利用することは効果的な教育を行うために不可欠のこととなっています。そういうことも含めて考えていく必要があります。

参考までに、講義で配った感想プリントの一例をレポートの最後にあげておきます。

4．感想を書かせること、プリントして返すことの利点と欠点

この「感想プリント」の作成（タイピングと印刷）は1年の講義の前半は全部私自身がやりました。しかし、秋頃からは、学生にタイピングしてもらうことができました。学生のワープロ・コンピュータ利用の状況は5年前と大きく変わりました。現在では、教員がその気になればタイピングをしてくれる学生を確保することは十分可能になっています。したがって、学生に講義の感想を書かせてそれを次の週にプリントして配ることは大学の講義を改善するために有効な一般的方法のひとつとして考えていいと思います。この方法の利点は次のことです。

まず第一に、講義に対する学生の反応を知ることができることです。しかし、講義内容についての学生の反応を知ることだけなら、それは感想を書かせなくてもだいたいわかることです。より重要なことは、この反応を教員とすべての受講生が目に見える形で知るということです。それは教員にとっては、「学生が理解でき、学生が満足する講義をしなければならない」という無言の圧力を自らに対して加えることになります。学生にとっては先にも述べたように、友達の感想や意見を聞いて違った観点から講義を考え直すことにつながります。講義の形式の中で教員→学生、学生→教員、学生→学生の相互作用を作ることになります。これが第二の利点です。うまく進んでいけば学生がお互いプラスの刺激を与え合いながら講義を進めることができます。

「地域と福祉」の講義では、障害当事者や現場のスタッフの講師の力を借りてこの好ましい循環作用を作り出すことができたと考えています。重要なことはその講義を学生が「おもしろい」「勉強になった」と受けとめることです。私が最近大学の授業

について考えるのは、「これだけのことを学生に理解させなければならない」という教育の目標と「学生に講義を受けて勉強になった、おもしろかった」と学生に感じさせることとの関係ということです。かつては押しつけ的に前者が先走り、学生自身の主体的な（ある場合には主観的なものかもしれない）要素を軽視してきたように思います。講義を受けておもしろかった、楽しかったと思わせることは最も基本的なことです。講義の結果を教員だけが判断するのではなく、教員と学生が共同で判断する一つの資料として、感想プリントを全部タイピングして配ることは意味があると思います。別に、この方法によらねばならないということはもちろんありませんが、自分でも今日の講義は「うまくなかった」と思ったときは「感想」もおもしろくないし、読むのに気が滅入ることになります。「うまくできたようだ」と思ったときの感想は読んでいて楽しくなります。「どれだけ理解させたか」とはちょっと違った「どれだけ勉強することを面白がらせたか」ということを見る「リトマス試験紙」として極めて有効な手段のように思います。

すべての教員が、学生に勉強しておもしろかったと「感じさせる」授業をいかにして行うか、これを妨げる壁が何であるかということを議論することが必要だと思います。

感想プリントを配る方法の欠点は、タイピングをすることと膨大な資料を印刷することの問題です。これは講義のクラスサイズの問題にも関わることです。これまで私の担当した講義は、一番多い時（つまり年度の最初）で80名ぐらいで通常の実際の参加者は多くて50人から60人ぐらいまででした。先ほど述べたように、この規模なら受講生の中にタイピングの仕事を請け負ってくれる一人の学生を確保することは可能です。機械的に考えると、規模が大きくなっても仕事を分担して複数の学生にタイピングしてもらえばいいことです。メールを利用する学生であれば仕事の連携がとてもうまく進むと思います。講義をする側と講義を聞く側が感想のタイピング・メールの利用を通して年間の授業を協力して運営していくという「〇〇講義運営委員会」のようなものをつくることができるかもしれませんし、通常の授業とコンピュータ教育を連携した新しい教育システムを作ることも可能かもしれません。

こう考えると、タイピングの困難は今ではあまり大きいものとはいえません。学生たちの感想がおもしろいものであれば（つまり講義の内容がおもしろければ）学生たちの協力は十分可能と思います。問題なのは、これを印刷して次週の講義に間に合わせて全員に配ることでしょう。クラス規模が増えれば、それに比例して印刷量が増えます。感想のみでなく、次の新しい講義で使う資料の印刷が加わればさらに量が増えます。今は感想をプリントして配っている教員はほとんどいない（と思います）のでいいけど、こういうやり方をする人が増えれば確実に施設課の印刷機はパニックになると思います。そういう意味では現状では一般的に普及させることは難しいかもしれません（「他の人がやらないから私がやれている」のでしょうか!?）。

タイピングしたものを次の週に配るのでなければ個々の教員にとっては余裕が出てきます。印刷しないで電子データで利用するだけならもっと簡単です。受講生がみんな学内のネットワークを利用するようになればさまざまな可能性が出てきます。講義用のホームページを作ることもできます。コンピュータにデータを取り込めば加工も自由にできます。年度末に、ある学生の感想を全部まとめて第１回目から読み直してみると、この学生はいつも適当な感想を書いている、この学生はあまり書かないが時々よく考えておもしろいことを書いている等ということが簡単に分かります。ただし、講義でネットワークを利用することは私はまだできていません。現実にはいろいろな問題が出てくるのではないかと思います。最も大きい問題は、現実には一部の学生しかネットワークを使わない（使えない）ということです。ネットワークをすでに利用している教員もいるので機会があれば教えてもらおうと思っています。

５．大学の自己点検と講義の自己点検

先にも述べたように、以前地域研究所の教育問題研究班で出席カードの利用や感想を書かすことについての議論がありました。しかし、大学全体の議論には進まず、また実践している人の話もそれ以後あまり聞かれなくなりました（私が知らないだけかも知れませんが）。私は、感想を書かせることについては今再度議論していいのではないかと思います。単に書かせるだけなら、講義のクラスサイズに関わらず実践できます。

感想を書かせることには教員としては勇気が入ります。感想を書かなかったり、無内容な感想が書かれたりすると読んでいてがっかりするからです。だいたいうまくいかなかったと思ったときはそんな反応が返ってくるのが予想できるので、よけい憂鬱になり読む気にならなくなります。しかし、学生に書かせてそれを読むことによって、教員は学生の生き生きした反応が帰ってくるような講義をするよう、自分で自分を強制することになります。感想を書かせるだけでもそういう意味があります。その上で、感想を全部学生に返すことは教員と受講生全員が判断を共有する（正確に言うと判断資料を共有する）という意味を持ちます。

今沖縄大学の受験生が減少し、大学の危機が沖縄大学にも押し寄せていると言われています。ここで最も大事なことは学生が大学で学んで充実したという意識を持つような教育を教員が行うことだと思います。そうした学生の意識・主体性が学生の成長を促すことになります（自動的に成長するわけではありませんが）。

大学の「自己点検」ということがよく言われますが、教員（学生や職員も自己点検する責任主体だと思いますが、やはり教員が最も大きな責任を持つべきでしょう）が自発的に自己点検することと他者と相互交通（情報の共有、意見交換、批判など）することを両方組み合わせなければ「自己点検」も形骸化するのではないかと思います。

6．初級「福祉教育」としての「地域と福祉」

「地域と福祉」の講義は当初のねらいどおり、障害者問題について特別な知識や経験を持たない人でも「ノーマライゼーション」や重度障害者を含む「自立」の新しい考えを理解してもらう初級教育という目的を果たしました。それは新しい「法経学部法経学科」の科目としてふさわしいものでした。今後、学生たちが福祉に直接関係する分野以外に進んでもそれぞれの分野でこの１年間で学んだことを頭において活動していけば、沖縄の社会はずいぶん変わるだろうと思います。現代社会では、かつての「教養教育」（沖縄大学でいう共通科目）の一つとしてこのような科目が不可欠のように思います。また、このような講義を、大学だけではなく社会福祉協議会などと連携して福祉教育として系統的に進めていくとすばらしいと思います。

今年の４月から発足する人文学部福祉文化学科に関しても、このような講義は初級教育として重要な意味を持つと思われます。しかし、この場合には、これをより専門的な学習にいかに発展させていくかという課題が問題になり、当然のことですが「地域と福祉」だけでは解決しきれません。またノーマライゼーションの実現のために、経済や法律、行政の仕組や社会の仕組みをどのように変えていくか、そうしたことが障害を持たない「健常者」にとってどんな意味を持っているか等という課題は、ひとり福祉文化学科のカリキュラムの領域のみの問題ではなく、法経学部の教育課題でもあり、また沖縄の障害者がアジアを含む世界の障害者・「健常者」といかに関わって生きていくかということを含め国際コミュニケーション学科のカリキュラムとも関わるものです。そうしたことも頭に置いて今後の私の研究と教育を進めていきたいと考えています。

ただ残念なことに、新しい福祉文化学科のカリキュラムではこの「地域と福祉」の講義をとっても卒業必要単位には計算されません（受講することはもちろん可能ですが）。隔年開講なので次回の開講は2000年度になりますが、そのときもできるだけ多くの学生が積極的に受講するよう望んでいます。

地域と福祉第15回感想　(1998年10月20日　配布10月27日)

先週の講義概要
「障害者の性とノーマライゼーション」嘉手川重常（大平養護学校寄宿舎寮母）

Ⅰ　どんな重い障害があっても、結婚や同生（同棲）、パートナーとともにくらすことが生きがいある人生に欠かせない。人が人として生きていくためには性は一番本音の部分で、性の問題がノーマライゼーションのカギをにぎる、という話から始まりました。

ノーマライゼーションの原則の一つ＝「男と女のいる世界に住むこと。男性と女性が毎日の様々な場に普通にいること。また希望するカップルは一緒に住めること」

Ⅱ　もともとは日本は（沖縄も）キリスト教社会と異なり性に関してはおおらかだったが、明治以降儒教思想と天皇を頂点とした家制度のもとで、国家による性の管理と庶民の性文化の規制が行われ、他方で公娼が設置され、やがて近代日本は性産業の大国、性教育の後進国になり、性の問題は「下半身の問題」として扱われ、女性や障害者の性は無視され、差別されてきた歴史が述べられました。

Ⅲ　つい最近まで、文部省は性教育を避け、エイズの問題によりやっと教え始めてきたが、これまでの偏見が根強く残り、「寝た子を起こすな」と性交の問題を避けて通るなど多くの問題点を抱えていることが指摘されました。

Ⅳ　ついで、性の問題の基本的な捉え方として、
①性は本能ではなく、学習するものであり、
②性交は、1.子孫を残す生殖という意味、2.人を愛するという文化としての意味、3.暴行、強姦、売買春などエゴイスティックな性の３つがあり、第2，第3が人間特有なものであり、
③人間らしい性が育つために学習が必要であること
が述べられました。

Ⅴ　そして、「人間らしい性が育つために」、
①ふれあい（スキンシップ）こそ性の原点
②人は愛されることにより愛することを学ぶ生きもの
③マスタベーションは性欲をてなづける、性のコントロールの訓練として肯定する
④性を学ぶことは人間関係を学ぶこと・いたわり、思いやり、自分の体を知り、相手の体も大事にする事を学ぶこと
⑤性被害に遭わないように、「NO！」が言える人間に。性加害者にならないように。

という５つの内容が提起され、そして、写真や人形を使いながら、実際に養護学校で行われている性教育の紹介が行われました。

障害をもたない人が普通に暮らしていく生活の中で覚えていく性の知識をつい何年かまえまで日本では障害者に教えてなかったというのを知ってびっくりした。日本は普通の人々に対する性教育も遅れていると言われているので、何となく理解できるけど、全く教育されてこなっかたのは障害者の人権などないに等しいと思った。これからは正しい教育を受けられる世の中になってほしいものだ。

重い障害をもつ方々も、結婚や人生のパートナーと過ごし、生きがいある人生には‘性’ということが色々とついてくる。そのためにも、性に対する教育や感情を豊かにする必要があり、全ての人々が性の権利を享受することの大切さを学びました。

障害者が性のことにどのくらい関心があるのかと考えたことがあったが、話を聞いてここまで関心を持っているのかとびっくりした。

今日の講義の障害者の性教育のついて。しっかりした知識や絵を見せながら、僕らが中高で習ったよりもちゃんと教えてた。同じ人間なんだから、人を好きになったりして生きがいを見つけられたらいいと思う。

当たり前のことが、世界すべての人類にとって当たり前、障害者だろうが老いも若きも南も北も‘当たり前’そのことを本当に理解できているか。今日の講義も性行為について「そんなの当たり前のことでしょ」て、頭でわかっているようでわかっていないんじゃないのと自問してしまった。

私も何年か前までは、障害者の人びとの性と言うことに関しては何の関心もなかったし、考えたこともなかったが、何年かまえにスウェーデンの障害者の性について書いてある本を見て知った。

今日は、今の日本に遅れている「障害者の性教育」についてだった。しかし、私たちとしては健常者の「性教育」もまだまだ遅れていると思う。だから、障害者に教える先生達（今日の話でも学校の先生達自身が誤解しているという話がありました）も、性教育を受けないできている部分があると思う。まず、教える側がきちんとした知識や考え方がなければ障害者に対しての教育は不可能だと私は思う。

私も振り返ってみれば、いつ性について知ったのだろう。小学校の時、授業でやったのを思い出しました。性について、何も感じなかったのですが、今日講義を聞いて私たちが学んで、障害をもった方が勉強しないなんておかしいなとはじめて気づきました。障害をもった方達が自身で学ぶのも必要のことですが、私たち、

一般の人々の意識の持ち方もとても必要なことではないかと思いました。

今日の講義では、「人間が人間らしく生きていくとは」ということをとても考えさせられました。タブーになっている障害者や老人の性の問題をしっかり見つめていくことが、私たち自身のほんとの性の解放につながるのではないでしょうか。障害は、人類が進化していく過程の中で誰かが負わないといけないリスクだという話がありましたが、以前、細胞が分裂し、進化を繰り返していく中で奇形が生まれるのも当たり前じゃないかという話を聞いたことがあります。その時、障害をもつということに心が軽くなるような気がしました。前の講義の新門さんの介護保障制度の話を思い出しました。人間が人間らしく生きていくために、やはり、気兼ねなく介護の手が受けられることはいいことだと思います。

嘉手川先生の講義を何回か聞くうち、最初は障害をもった子の性の問題に関して、自分自身、大変なことだと思っていたことが、自分が体験してきたのと同じような感覚で接していけばいいと思えるようになってきました。男の子なので、お父さんと触れ合う機会を多くし、お風呂に関しても、性器の洗い方とかは父親にやってもらったりしています。まだ、射精はないようですが。少しづつ話せるように軽く「どう？」とか、同じクラスの女の子の生理の話とかも最近は話が出てきています。恋愛の件ですが、障害者本人達が、とてもイキイキしていて中にはカップルも何組かいるようです。この子達が、何の心配もなく、結婚できるような制度とかがあれば良いと思います。息子にもやっぱりステキな恋をしてほしいから（聴講生、障害児の親）。

妊娠から出産への演劇授業、そしてその中での本物の妊婦さんの体とのスキンシップは、とても良い性教育で、障害をもった子どもたちに限らず、普通一般に学校で行われるといいなと感じました。

私は学校で性教育というものを受けましたが写真で見たようなものはなく、教科書やNHKで放送されるわずか数分のものでした。写真を順に見ていて、「このような教育があった方がよかった、あればいい」と感じました。全ての人が改めてこのような性教育を受ければ、性に対しての思いも何かしら、変わるのではと思いました。

講義の後半で、実際にどういう性教育をされているか紹介してもらいましたが、すごくおもしろかったです。こういう具体的な性教育を受けたことがなかったので、驚きました。障害者に限らず、こういう教育は必要だと思いました。

9年間の義務教育と3年間の高校生活を振り返ってみても、生や性について学んだ中で、今回の講義ほど詳しくはなかったと思う。実際、この講義の1/10に値する内容であったか？とも思えた。

“性”の問題については障害者、健常

者あるいは子どもから大人に限らず、公に話す事へのタブー視がある気がします。話はそれますが、「エイズ患者への偏見をなくそう」とかよく聞きますが、単にそれだけの啓蒙には限界があると思います。どうしても“性”行為が当たり前に必要でありながらも、その必要性、重要性は語られずに、ある意味で恥ずべき行為としてうやむやにされている現状にあるからだと思います。秘密にされていることには興味や関心が湧きます。誤った行動に走らざるを得ないこともあると思います。やはり、正しく伝えれば、余計な心配（かえって性行為に走る）は解かれるのではないでしょうか。

私の職場（特養老人ホーム）でも、男女の部屋は別々である。入所している誰もが、今まで人間としてノーマルに生きてきたのに、男だから、女だからと切り離される。そこには味も素っ気もない生活しかない。ホームにはいると、性とは無縁と思われがちだが、それは全く違う。このままでは、男部屋はサツバツとし、女部屋ではおしゃれを忘れ（女を捨て）人間を捨てる。一緒にすると生き生きするのではと思う。

AIDS がはやってきて、しかたなく日本の社会は性教育をやり始めたと言っていたが、たしかに、学校でリアルに学習したことはありませんでした。ただ、偏見ではないのですが、写真で見たようにリアルに教えるというのは、ちょっとどうかなあと思うところがありました。

今日の「障害者の性」の講義はとても身にしみて、私自身色々勉強になりました。まず、言えることは、障害者だけに限らず、私たちにも「性」の指導教育がされてこなかったという結果ですね。また、スキンシップの大切さ。これがあってこそ、人は他人にもやさしくなれる、そういう環境づくり、大切だと思います。とてもすばらしい講義でした。

前々から、障害者の性については疑問を持っていたのですが、今日の講義を受けて障害者にも性欲はあるし、性交もするんだと知れて、自分たちと何も変わらないことがわかった。プリントに「人は愛されることにより愛することを学ぶ生き物だ」と書かれていたのを見て、とても自分自身が納得できた。

障害者の性問題に対して、真剣に取り組んでいる職員のみなさんの努力に感激しました。このような取り組みを一般の健常者の教育の中にも是非取り入れてほしいと思いました。今の大人自体、性教育を受けていない！という言葉通り、今日の講義を聞いていて、私自身、改めて、性に対する認識が深められたと思います。小学校から中学、高校と各段階での性教育の必要性を感じました。

障害者も障害を持たない私たちも、“人が人として豊かに生きれるような社会を築きあげる…。”歴史を学びながら私たちは何をすればよいのかを考えさせられる講座でした。人らしく生きれる世の中を。お疲れさんでした。

性の問題は日本では身近なタブーであって、国はあまり教えたがらないというが、それは重大な間違いだと思います。性というのは大事なものなのだから、よけいタブー視してはいけないのです。

障害者の人に性的感情がないと思っている人がまだいるということに驚きました。まだ日本では性教育がきちんと行われていないということで、こういった問題は大切なことだと思うのでもっと教育していくべきだと思います。

障害者問題に、性のことも含まれるとは思っても見なかった。自分たちと同じように恋したり、性のことで悩んでいると思うと、障害をもつ人が身近に感じられる気がしました。

今日のテーマは「障害者の性について」だったが、障害をもったものに対してもやはりちゃんとした性教育を行うことが大切だと思う。半端な知識を持つことによって、間違った性が行われることがあるという事実を聞いたこともある。教育によりそれを防げるならば。

私たちの意識の中では性に対して‘悪’のイメージがどこかにありますが、今日の講義でそれが日本の性教育のレベルの低さであることに気がつきました。そして、性教育が生命の大切さを考えることができるものであると感じました。

今日の講義で性教育の大切さや難しさを知った。

「豊かな生と性の権利を」と資料に書いてあったように、障害をもつ持たないに関わらず誰もが人間としての生と性を豊かに、たった一度の人生をエンジョイできる制度は大事じゃないかと思いました。今までは、生活していく上での不便さや介護の難しさを学んできましたが、今日は障害者の性について学ぶことができ、こういった問題もあるということがわかりました。

今日の講義で、障害者と健常者、関係なしで性教育が必要だと思った。

障害をもった子どもたちに対して、このような形で、体のしくみや性についてくわしく、わかりやすく、ちゃんと教えているということは、今日はじめてわかりました。体の成長とともに心も成長する我々にとって、自分の体のしくみや、社会に対する行動、やっていい事いけない事、しっかり普通の子どもたち以上に一生懸命教えていることに対して、すごく感心しました。

性教育の難しさがわかりました。

ノーマライゼーションの原則には全てに「普通の」という言葉が当てはまることを知ったし、性の問題を当たり前のこととして割り切って教えることによって、当然のことだと知ることができると思いました。

プライベートであることが当たり前であると考えて性というものを見てきたが、障害があるからとか、そうでないからというのに関係なく性について考えることができた。性犯罪が多発している現在、我々全ての人々は性教育というものをもう少ししっかりとしたものにしていかなければならないと感じた。

性教育の重要性が改めて理解できた。

養護学校の性教育が、普通学校の教育より具体的で実際的であるのに驚きでした。性教育というと、小学校の時に男女別々の教室で、スライド等を見ていった様な気がします。男女別々というのも、なんか、秘密裏的であり、その後も男女共に気まずい雰囲気が教室の中に漂っていました。そういう教育がいまだに性というものをタブー視している原因であると思います。養護学校では障害をもつ人々(中には知的障害者もいて) 達に理解できるような教育の工夫がされていて、性というのをいやらしいものとか感じずに、彼らが真摯に性と向き合うきっかけになっていると思いました。日本はもっと社会的に性に対する考えをオープンにし、皆で考えていく必要があるのではないだろうか?

感想なし

理由があって欠席したもの3名